平成２０年度国立大学図書館協会地区協会助成事業報告書

標記のことについて次のとおり報告します。

添付資料：　『ラーニング・コモンズ』フォーラム資料集

実施 地区名	東海北陸地区 （主担当大学：名古屋大学）
事業名	『ラーニング・コモンズ』フォーラム：図書館における学習教育支援の新展開
事業目的・ 趣旨	東海・北陸地区国立大学図書館協会主催により，東海・北陸地区７県（愛知・岐阜・三重・静岡・石川・富山・福井）の国・公・私立大学図書館や公共図書館の関係者を対象としたフォーラムを開催し，『ラーニング・コモンズ』に代表されるような新しい利用空間や利用者サービスの在り方について館種を超えた検討を行うことを目的とする。 学生や市民の学習ニーズの多様化にともない，大学図書館や公共図書館にもそれらに対応する支援環境や体制の整備が求められる中で，これまでの静謐な個別学習空間だけではなく，「グループ」で「デジタルと紙情報」の双方を同時に利用でき，しかも様々な「人的サポート」を受けながら創造的な考える力を醸成できるような学習空間・利用者空間が必要とされている。『ラーニング・コモンズ』はこのような要請を実現するための施設でありサービスと捉えることができる。 このフォーラムでは，米国を中心に展開されている新たな学習教育支援空間『ラーニング・コモンズ』における施設やサービスをヒントに，国内外の導入事例を参考にしながら，我が国における導入可能性及び図書館の果たす役割，並びに図書館における利用者空間の在り方について，一定の方向性を見出すことを事業趣旨とする。
事業概要	開 催 日：平成２１年3月１８日（水） 開催場所：名古屋大学大学院文学研究科 127 講義室 主　　催：東海北陸地区国立大学図書館協会 内　　容： １．講演会　　　１０：３０～１２：００ 井上創造（九州大学附属図書館　研究開発室　准教授） 演題：　米国における Learning Commons 事情について ２．ワークショップ　　　１３：３０～１６：３０ ○ラーニング・コモンズ施設の事例紹介・活用について 事例報告 橋本　春美（東京女子大学　教育研究支援部図書館課長） 波多江貴子（名古屋工業大学附属図書館　学術情報課情報サービス係） 山内　隆文（名古屋学院大学　学術情報センター） 井上　　修（名古屋大学附属図書館　情報管理課長） パネルディスカッション 助　言：　三根　慎二（名古屋大学附属図書館　研究開発室　助教）
経費	執行額　300,840 円
	内訳 講師等謝金・交通費　　　149,640 円 配付資料印刷費（７０部）　70,350 円 看板等作成費　　　　　　80,850 円

内容のまとめ

参加者数：　72名
　　　　　　内訳　大学図書館　69名（国立　48名，公立　5名，私立　16名）
　　　　　　　　　公共図書館　 1名
　　　　　　　　　その他　　　 2名（高専，NII）

＜講演＞
井上創造（九州大学附属図書館研究開発室）
　演題：　米国における Learning Commons 事情について

　ラーニング・コモンズの定義や歴史、何故今ラーニング・コモンズなのか、や、２０年後の図書館像について、電子ジャーナル、機関リポジトリ、自動書庫、電子ペーパー、RFID図書館、ICカードなどの観点から、現在の図書館事情とGoogle、Web2.0、SNS などの主にバーチャルな世界に存在する「ライバル」との関連を中心に、われわれ図書館側の自己成長又は自己改革機能の必要性が強調された。その上で、早くからLibrary Commonsを設置した米国マサチューセッツ大学アマ-スト校の事例について報告があった。
　その特徴として、１）カフェ施設（午前1時までオープン；倒れてもこぼれにくいlibrary coffee cup)、２）勉強が完結できる場所、３）PC260台完備と利用状況一覧システムの導入(情報処理センター管理分200台(大学ライセンスのソフトウェア有)、図書館管理分60台)、４）様々な形態の机やブース（パーティションで仕切られた机、ガラスで仕切られたミーティングスペースなど)、５）テクニカル・サポート（常勤スタッフと学生スタッフ、それぞれ3交代制)、６）コピー機、プリンター、自動販売機の自動管理システム（Pharos)、７）ブースでの携帯電話使用可と携帯電話ボックスの完備、８）各種人的サポート（学生支援のための各種センター分室設置；就職指導センターや執筆指導センターなど)、９）図書館職員におる情報リテラシー講義、10）レファレンスサービス、11）授業時間と重複しない各種窓口のオープン時間、などの要素が挙げられた。この他、韓国における導入事例や九州大学における取り組みについて報告があった。

＜ワークショップ＞
事例報告
①　東京女子大学
　「マイライフ・マイライブラリー：学生の社会的成長を支援する滞在型図書館を目指して」と題した報告があった。まず全体を「学生１人ひとりが，図書館を「マイライブラリー」として自分流に利用しながら滞在し，「マイライフ」の構築を目指し，社会的成長を図ることができるように支援するプログラム」への取り組みとして位置付けた。ハード面が「マイライブラリー」であり，多様な学生ニーズに対応した空間をもつ滞在型図書館と定義，設備としては，１）メディアスペース（シンクライアントPC50台）(eBookやeJournalによる情報検索・収集から論文作成まで可能)，２）コミュニケーション・オープンスペース（自由に意見を交換し，グループ学習できる場)，３）プレゼンテーションルーム（学内イベントの実施，ガラス張りの部屋)，４）リフレッシュルーム（学習の合間に気分転換できる空間，飲食可能)，５）グループ閲覧室と個人ブース（遮音性の高い高密度なグループ学習のできる部屋，ひとりで集中できるスペース)，から構成される。
　一方，ソフト面が「マイライフ」であり，多様な学生ニーズに対応した「学生協働サポート体制」を中心とする支援，具体的には，１）ボランティア・スタッフ，２）サポーター，３）システムサポーター，４）学習コンシェルジュ（大学院学生)，による多彩な支援体制が構築されていた。

②　名古屋工業大学
　耐震改修に伴う学習空間の見直しによって，新たな空間が生まれることとなり，１）

様々な学習・研究スタイルへの対応，２）多様な要求に柔軟に対応できる多目的空間の提供，３）長時間滞在したくなるような快適な空間，４）「動」「静」のゾーニング，をコンセプトにしたこと，学内にある関連のラーニング・コモンズ施設，すなわち自学自習スペース（グループ机は飲食可）と学習支援スペース（「先輩のいる学習室」）から成る学生の集う場所「ゆめ空間」との連携が極めて密であることの報告があった。

③　名古屋学院大学

学内組織（外国語教育センター，基礎教育センター，情報教育センター，附属図書館）の統合による新学術情報センター構想の中で，学習形態により性格の異なる空間が発想され，自ら静かに学ぶ「静的な学習空間」として図書館が，仲間とワクワク学ぶ「動的な学習空間」としてラーニング・コモンズが誕生した旨の報告があった。この動的学習空間では，学びの自由空間として声を出しても良く，ペットボトルも OK，各種イベントも実施される他，PC 利用サポート，TA による学習サポートが提供されていた。一度，身体（物，建物，空間）と精神（情報，電子図書館，電子ジャーナル）とに分離したシステムを再構築し，図書館概念を一新することで組織を再生しようとする自発的な試みがラーニング・コモンズであると結論付けた。

④　名古屋大学

平成 20～21 年度の２年計画で構築中のラーニング・コモンズの構想とゾーニング，その機能などについての報告があった。

背景として，１）多様な学生・社会人の学習ニーズ（学習目標・学習形態・学習方法）に対応できる学習の場，学生生活の場の整備が必要であること，２）爆発的に増加する電子情報と膨大な印刷体資料を有機的に活用するハイブリッド・ライブラリを名古屋大学附属図書館がすでに構築中であること，３）ユニバーサル・アクセス時代（大学全入時代）の到来により大学教育の質の維持・向上が求められていること，が強調され，そのラーニング・コモンズ空間の構想された特徴的な機能としては，１）学生の学習に必要な情報資源・情報技術関連設備，それらの活用能力を育成するためのサポートを統合的に提供する，２）レファレンスサービス，情報リテラシー教育，情報技術活用支援，学習相談等を一箇所で受けられるワンロケーション・サービスである，３）これを実現するために，図書館と学内の教育・情報施設との連携・協力の強化する，４）様々な学習形態に対応したスペース・設備・ツール・情報資源を統合的に提供する，５）デジタル・コンテンツと印刷体から成る図書館資料をシームレスに活用できる能力を効果的に育成する情報リテラシー教育の実践の場を提供する，６）今後の大学図書館における教育支援機能及び基盤設備整備のあり方のモデルを提示する，ことが報告され，完成後のパース図の紹介があった。

事例報告の後，三根慎二名古屋大学附属図書館研究開発室助教の司会のもと，5 名の講師によるパネルディスカッションが行われ，日本の特色を生かしたラーニング・コモンズの構築，運営を支える環境と体制，利用者サービスの在り方などについて活発な質疑応答があり，有意義な情報提供，情報交換の場となった。